

### 3年 算数科研究授業のまとめ（11月17日）

#### 1 単元名及び単元の目標

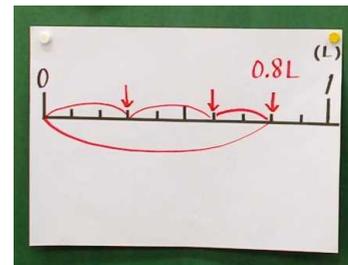
はしたの大きさの表し方を考えよう（7 / 12本時）

◎小数の意味や表し方について理解し、小数の加減計算ができるようにする。

#### 2 本研究授業の提案について

小数のたし算のやり方について、0.1がいくつ分かを考えて計算できるように、以下の二つの提案を行った。

- (1) 一つはカードゲームの活用である。児童の実態から、小数のたし算について、形式的には答えを求められる児童が多いことが予想された。そこで0.1・0.2・0.3の3種類のカードを用意し、ひいたカードの和ができるだけ1に近い人を勝ちとするカードゲームを取り入れた。そして互いに3回ずつカードを引き合い、その過程が分かるように図などに示していく活動をペアで行わせた。その結果、どの児童も3回の結果の和を出そうと、意欲的に取り組んでいた。従ってこの活動は有効であった。



【資料1・結果を示した数直線】

- (2) もう一つは既習事項を使ったゲーム結果の記録化である。既習のリットルマスや数直線のワークシートを用意し記録をさせた。その過程で、自然にお互いの考え方を教え合い、間違いも修正しながら活動できていた。またカードの和がいくつになるか目盛を数えて説明し合う姿が見られ、0.1に注目することができていた。ただ、その後立てた式とゲーム結果の考え方の説明とがどう結び付くのか、という点の押さえが不十分だった。そして小数のたし算は、結局どのようにしたらよいのかというまとめを、児童自身の言葉で十分にさせることができなかった。そのため、最も大切にすべきはずの本時のねらいをしっかりと理解させることができず、この時間で何を学んだのか児童の中で不明瞭なまま終わってしまう結果となった。

#### 3 本研究授業の授業技術課題について

普段の算数の授業での様子やレディネステスト等を通して児童の実態をつかみ、本時において意図的・計画的な声掛けを行うことができた。また、予めリットルマスや数直線のプリントを用意し、児童が自ら選択できるようにしたことで、既習事項をスムーズに活用し、ねらいに迫るための考え方をまとめることができていた。

#### 4 今年度の研究を振り返って

児童が学びの中で再考することで、より確かな学習理解ができることを目指して、2回に渡って授業を行った。その中で共通して課題となったのは、1時間の中で児童に身に付けさせるべき学習内容（ねらい）が、きちんと達成されたかどうか、ということだった。例えば、小数のたし算について、考えは深まったが実際の計算はできるようになっていない、ということでは本末転倒ということになってしまう。また、指導案上で計画した学習活動は、そのねらい達成のために本当に必要なものかどうか、という点にも注意すべきだった。今後は、何を、どのような手だてで、どの位の時間をかけてすれば児童全員がねらいを達成できるのか、単元全体を見通し、児童の実態も踏まえて計画を吟味していく技能を高めていきたい。